

作業を強調した時代からの飛躍

港 美雪

NPO法人ハピネスたかはし会
元・吉備国際大学作業療法学科

1980年にElizabeth Yerxa氏は、作業の知識を増やす新しい学問として、作業科学を提唱しました。その後1989年、南カリフォルニア大学大学院博士課程に作業科学専攻が設置され、事実上、学問としての作業科学が誕生したことになります。以来、作業科学は、人間の生活において作業がいかに中心的な存在であるのか、またいかに健康、社会的発展などへ影響力を持っているのかを示し、作業の重要性を強調してきました。このことは、人々の生活の作業に関わり、健康や生活の建て直しに貢献する作業療法の根拠となる学問として作業療法を支えることにつながりました。また、作業は、例えば人間が何をどのように行うのか、そしてその体験や結果を通して、どのように個人的、社会的意味につながり、健康や社会発展へ影響を広げるのかを考えてみるとわかるように、とても複雑です。作業科学は、このような作業の複雑さを探求する研究へと私たちを導いてきたと言えます。さらに、作業科学は、作業療法に新しい支援の視点や方法を提案してきました。

このように多岐にわたり影響力を発揮してきた作業科学ですが、日本の作業療法士が初めて知る機会を得たのは、札幌で、故佐藤剛先生によって第1回作業科学セミナーが開催された1997年です。その後、広島、静岡、大阪、岡山、東京、福岡、沖縄など、全国各地で14回の作業科学セミナーが開催されています。2006年に日本作業科学研究会が発足、作業科学研究のジャーナルが2007年に初めて刊行され、本号をもって5冊目が発刊されました。日本におけるこのような作業科学を広める取り組みは、作業を強調し続け、作業療法の世界にも影響を与えてきました。例えば、日本作業療法士協会の作業療法の定義には、生活作業を実現する視点はなく、現在も未だ発展はありませんが、作業療法の現場からは、「作業」、「意味ある作業」、「健康」などの言葉が聞こえてくるようになりました。2011年に開催された第45回日本作業療法学会では、「意味ある作業の実現」がテーマとして取り上げられ、生活作業を実現する視点が日本の作業療法の土俵にあがったと言えます。そして、来年度(2012年)の同学会では、「健康な生活を創造する作業療法の科学」がテーマとなっており、生活作業に関わる作業療法へと大きく動き出します。

札幌で開催された第1回の作業科学セミナーから15年、来年2012年7月に、再び同地で第16回作業科学セミナーが開催されます。この感慨深い札幌での作業科学セミナーを前に、私はこのセミナーを節目として、作業科学の未来と、そして日本作業科学研究会の未来について語り合う時が来たのではないかと感じています。これまでの作業を強調した時代から、どのように次の時代へと飛躍していけるのでしょうか。作業とはどのような視点から捉え理解することができるか、どのように作業科学を実践につなげていけるのか、どのように作業科学は社会へ影響力を発揮できるのか、どのような作業科学研究がなされていくのか、どのように人がつながり刺激し合い力を合わせられるのか、私たちは何ができるのか・・・日本作業科学研究会の取り組みが推進力となり、描かれていく未来が、とても楽しみで仕方ありません。